

Nara Women's University

中国タリム盆地および周辺地域における古代遺跡と
その立地環境-Corona衛星写真の利用を中心として-(
人文地理学会歴史地理部会第100回部会発表要旨)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相馬, 秀廣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/982

中国タリム盆地および周辺地域における古代遺跡とその立地環境

—Corona 衛星写真の利用を中心として—

相馬 秀廣 (奈良女子大学)

従来のシルクロード研究では、遺跡、出土品（美術品など）、史資料などが主な対象であり、遺跡関係では、「お宝」が埋まっている古墳、遠く離れた地上からでも容易に識別可能な「囲郭」・烽火台などが主な対象であった。しかし、衛星データ・GIS などの普及により、研究対象も多様化し、地理学が貢献できる範囲はこれまで以上に増してきた。

そこで、「遺跡を、様々な空間スケールから観るとき、何がみえてくるのか（どのような立地条件に遺跡が分布するのか）？その特徴は？」、「どの程度まで詳細な判読が可能か？」、「現在のオアシス都市と囲郭遺跡との関係は？」、「囲郭遺跡のみではなくその周辺に目をむけ、囲郭内住民などの生活を支えた農耕地や灌漑水路跡などの状況は？」などを検討することを目的として、Corona 衛星写真の判読、現地調査などを実施した。また、一部については、2005 年に web 上に公開された、緯度・経度情報を有する Google Earth の衛星画像も利用した。

その結果、以下の点が明らかになった。1). オアシスおよびオアシス都市の立地条件は、基本的には、山麓の扇状地末端付近に立地する山麓扇状地 (P) 型、扇状地から連続して下流側の河畔まで広がる山麓-河畔 (P-R) 型、扇状地の下流にそれから離れた位置（いわば自然堤防地帯。ただし、その地形は形成されていない）に分布する『自然堤防地帯』河畔 (Rn) 型、そして、湖への流入地域に分布する三角州 (Rd) 型、に大別される。P 型が最も典型的であり、河川流量が増加すると、P-R 型、Rn 型なども形成される。しかし、単純に河川流量だけがオアシスの立地条件を規定しているわけでない。その他、これら以上に人為的影響が強い例として、カレーズ(Hc)型、人工ダム (Hd) 型、大量揚水 (Hw) 型などがある。カレーズ型を除くと、残り二者はほぼ現代のオアシスに限られる。2). 現代のオアシス都市と同一河川沿いに分布する囲郭遺跡の位置的關係は、現在のオアシス都市内に分布する「内蔵型」、最大でも 40-50km 以内の隔たりにある「延長・近接型」、および、100km 以上離れて分布する「遠隔型」に区分される。さらに、内蔵型は小規模扇状地と合流扇状地に分布する場合に、延長・近接型は同一地形面と異なる地形面に立地する場合に、それぞれ細分される。タリム盆地のシルクロード遺跡において、砂に埋もれたイメージが該当するのは、主に遠隔型である。3). 1)のオアシスの立地条件および2)の位置的關係を規定する要因としては、直接的、空間的には、保柳(1976)が指摘した上流域からの河川流量に加えて、扇状地下流側の地形形状が重要である。また、時間的スケールでは、氷河規模の変動に関わる短・中期的な気候変化、および、長期間にわたる活断層活動などに代表される地殻変動などの環

境変化が大きく影響している。4). タリム盆地南東部の米蘭遺跡，同北部中央付近の輪台地域南の遺跡群，さらに，内モンゴル西部，黒河下流地域の黒城遺跡付近では，Corona 衛星写真判読と現地調査により，囲郭周辺などに，灌漑水路跡および耕地跡が抽出された。文献・考古学的データによれば，それぞれ，3-4 世紀頃，唐代，少なくとも西夏・元代のものである可能性が高い。5). シルクロード関係の今後の研究では，囲郭など突出した遺跡のみでなく，灌漑水路跡や耕地跡など生活実態と関わる分野が重要で，環境変遷の視点の下，文献資料・発掘情報と「地形図」・「衛星データ」などの空間情報との有機的な結合が不可欠であろう。